

『最澄の思想と天台密教』

大久保良峻著

(法藏館・二〇一五年)

道元徹心

著者である大久保氏は既に『天台教学と本覚思想』(法藏館、一九九八年)及び『台密教学の研究』(法藏館、二〇〇四年)を刊行しており、それ以降に著者が発表された論文の中から最澄を根幹に系統立て構成された論考が本書である。本書は著者の専門領域である天台学・密教学を中心に、従来の研究において未解明であつた日本天台の諸問題に取り組んだ専門書となつてゐる。

日本天台は『法華經』の教理を中心に行圓教・密教・禪・戒の四宗を融合した教えが特徴で、そこに口伝法門(天台本覺思想)や淨土教の内容が交錯し融会してきたことも日本天台の特色として挙げられる。

本書の書名の一部ともなつてゐる「天台密教」(台密)は『大日經義釈』がその根本にある。天台教学と密教の一致を円密一致として最澄が説き、それが台密また日本天台の特質となってきた。最澄の思想には後の台密教学に通底する基盤があると研究は遙かに遅れていると大久保氏は本書のまえがきで指摘する。そのような状況のもと、本書は著者の前著である二書を踏まえ、最澄にはじまる日本天台の課題に対し新たに精緻な分析を發揮したものに仕上がつてゐる。

また本書は法華圓教の成仏論について、中国天台から日本天台の証眞に至るまでを中心いて教学展開を論考している。日本天台の成仏論は即身成仏を説いており、法華圓教としての即身成仏論は、最澄晩年の著『法華秀句』卷下「即身成仏化導勝八」に始まる。最澄が「即身成仏」の語を提示したことが後継者への課題と指針を示してゐるといふ。

まずはじめに本書の構成を以下のように示す。

I 最澄の思想概説

最澄と天台密教

一はじめに／二最澄の密教学／三天台教学と密教学／四德一との論争と密教／五まとめ

日本天台創成期の仏教——最澄と圓仁を中心に

まずはじめに本書の構成を以下のように示す。

II 最澄の思想——その源流と新基軸

天台教学における龍女成仏
一はじめに／二『法華經』提婆達多品の龍女成仏／三『法華文句』と『法華文句記』の解釈／四日本天台における解釈／五結語
最澄の教學における成仏と直道
一成仏論の問題点／二大直道思想について／三『註無量義經』について／四結語
最澄の成仏思想
一宗祖としての教學的特色／二最澄の成仏思想の帰結／三徳一との論争と密教義／四行位の問題／五結語
最澄と徳一の行位対論——最澄説を中心いて／四結語
一行位論鳥瞰／二初發心について／三通經の十地について／四結語
名別義通の基本的問題
一問題の所在と基本説の確認／二名別義通の諸様相／三小結
最澄の経体論——徳一との論證を中心に

一はじめに／二天台經体に対する徳一と最澄の議論／三徳一の經体説への論難をめぐつて／四その他の問題点／五結語

III 天台密教の特色と展開

安然と最澄

一問題の所在／二最澄の著作と安然／三法相宗に関連して／四結語

天台密教の顯密說

一顯教と密教／二秘密教としての『法華經』／三密教と秘密不定教／四顯教と圓教／五結語

一念成仏について

一一念とは／二一念と時間／三成仏と一念／四『五部血脈』／五念成仏義について／五結語

發心即到と自心仏

一心と成仏／二發心即到／三自心仏／四結語

東密における十界論

一はじめに／二東密の基本文献に見る十界／三『声字実相義』の註釈をめぐつて／四安然と東密義／五結語

『大日經疏指心鈔』と台密

一台密と東密／二『大日經疏指心鈔』における空海説の展開／三即身成仏思想に関する若干の問題／四『大日經疏指心鈔』の意義——結びに代えて

台密諸流の形成

一はじめに／二最澄の密教／三『四度授法日記』に見られる諸流／四台密十三流について——結語に代えて

IV 訳註圓仁撰『金剛頂經疏』大綱・玄義

あとがき

本書は四部構成からなり、第一部は著者の講演録が二つ収載され、後の専門の論考を理解する上で大変分かり易い導入となつており、工夫した配慮がなされている。続く第二部は最澄に関する論文から構成される。そして第三部では前著「台密教学」の研究以降の密教関係の論考が収載されている。最後の第四部は円仁の「金剛頂經疏」の冒頭部である玄義の箇所について、本書書き下ろしの訳註研究が収められた。そこに台密の基盤が凝縮されている理由からとされる。

三

次に、評者としてさらに詳しく第二部から本書の特徴的内容を紹介していく。

最澄の成仏思想の特色は即身成仏を論じたところにあって、それは晩年の「法華秀句」にみられる。しかし、著者は最澄がそこで即身成仏論を展開するには十分ではなく、後世へ継承される思想展開としての基盤作りにあつたと語る（四七頁）。

「法華經」提婆達多品に説かれる龍女の成仏に関する記述は、天台教學において即身成仏の観点から注目されてきた。本書では龍女成仏について中国天台の教學にさかのぼつて解明を試みており、それがやがて日本天台において如何に思想展開するか

を明解に論じている。

釈尊の面前で智積菩薩と龍宮で「法華經」を説いてきた文殊菩薩との対談がある。智積の問に対し文殊が次のように答える。

娑竭羅龍王の八歳になる娘（龍女）が刹那に菩提心を發して不退転を得た。それを受け智積は、釈尊ですら無量劫の難行苦行をされたのに女人が須臾にして正覺を成じるなど、と返答するやいなや、忽ち龍女が現れて仏を讚嘆する偈頌を説く。そして龍女が仏に宝珠を奉るが、その宝珠を仏が受け取る動作よりも疾く龍女は男子に変じて菩薩行を修し、南方の無垢世界で成仏するのである。そこで衆生のために妙法を説き、集つた一切の者たちは大いなる功德の「法華經」を信受していく。この説示より日本天台の学匠とりわけ最澄・円仁・円珍・安然などによつて龍女成仏に対する見解が示され、即身成仏や速疾成仏を論じる上の典拠となってきた。

智顗の「法華文句」によると、女人が今の体を捨てたり、新たな体を受けたりすることなく、現身成仏することを説く。また本書ではさらに湛然の「法華文句記」を取り上げ教義上の問題点を検討している（三九〇四一頁）。分段身の捨・不捨の問題があり、これは日本天台で即身成仏の考察上大きな問題となる。無生法忍を得ると生身（分段身）を捨てて法身を得るのが天台学の基本であるが、円仁・憐昭・安然が分段身の不捨を主張して独自の見解を示すと大久保氏は指摘する。またこの問題検討は「天台教學と本覚思想」（一〇三一五六頁）においても「即

身成仏論の展開」として円仁の即身成仏論の捨・不捨に焦点をあてて論考し、四種の「即身成仏義」を紹介して考究している。生身を捨てて法身を得る義と生身を捨てずに生身のままでいる生身得忍の二義の問題が存する。龍女の権巧は、生身を捨てて法身を得た龍女が実報無障礙土から来て南方無垢世界で示したこと、龍女がどこで法身を得たか明瞭でないと大久保氏は指摘する。龍女が実者か権者か、そして権巧・実得ということが複雑に絡まって展開する。実得とは無生法忍を得ても生身のまま、生身得忍の義とされる。

最澄以来、日本天台の成仏論は即身成仏の法門である。それは龍女成仏論とも言われその思想も一様でなく、龍女の成仏を様々な觀点から論究し即身成仏の理論構築と課題を明示したもののが本書である。

中国天台における龍女成仏の問題に十分な分析をなしたのが証真とされる。本書では彼の「法華疏私記」を検討し、捨・不捨の問題で智顗や湛然の解釈から展開して、証真が「生身のままに成仏するという實得の義」の解釈を指摘している（四三頁）。さらに証真とは異なる觀点から龍女成仏を考察したものとして聖覺の「例講問答書合」の教説を検証している。そこでは龍女を新聖か旧聖か、新聖の権（権巧）・実（実得）の二義に注目する。

本書において龍女成仏の問題について、無生法忍を得ることを如何に理解するかが重要で、それを積極的に論じるのが円仁

釈尊の面前で智積菩薩と龍宮で「法華經」を説いてきた文殊菩薩との対談がある。智積の問に対し文殊が次のように答える。娑竭羅龍王の八歳になる娘（龍女）が刹那に菩提心を發して不退転を得た。それを受け智積は、釈尊ですら無量劫の難行苦行をされたのに女人が須臾にして正覺を成じるなど、と返答するやいなや、忽ち龍女が現れて仏を讃嘆する偈頌を説く。そして龍女が仏に宝珠を奉るが、その宝珠を仏が受け取る動作よりも疾く龍女は男子に変じて菩薩行を修し、南方の無垢世界で成仏するのである。そこで衆生のために妙法を説き、集つた一切の者たちは大いなる功德の「法華經」を信受していく。この説示より日本天台の学匠とりわけ最澄・円仁・円珍・安然などによつて龍女成仏に対する見解が示され、即身成仏や速疾成仏を論じる上の典拠となってきた。

智顗の「法華文句」によると、女人が今の体を捨てたり、新たな体を受けたりすることなく、現身成仏することを説く。また本書ではさらに湛然の「法華文句記」を取り上げ教義上の問題点を検討している（三九〇四一頁）。分段身の捨・不捨の問題があり、これは日本天台で即身成仏の考察上大きな問題となる。無生法忍を得ると生身（分段身）を捨てて法身を得るのが天台学の基本であるが、円仁・憐昭・安然が分段身の不捨を主張して独自の見解を示すと大久保氏は指摘する。またこの問題検討は「天台教學と本覚思想」（一〇三一五六頁）においても「即

ることに基づき、その同一性を共の十地を中心に説き、最澄は通教と別教の十地の違いを力説することで天台教判の正当性を論じる（一〇九頁）。天台の典籍を用いて証真に至る「名別義通」の諸様相を明かしている。

四

本書の第三部は天台密教の特色と展開について詳細に分析している。台密を大成するのは安然であるが、安然の基盤となつたのが円仁の業績であり、両者の前には最澄が重んじた教義がある。それは真如隨縁論や經体論であり、安然では眼前的諸法をそのまま法身の活動と捉え台密の法身説法思想へ展開する。このような教理は、中国天台から最澄を経て継承されている重要性を大久保氏は指摘する（一五六～一五七頁）。また神通乗においても最澄から安然に継承されている。この神通乗については、大久保氏が『台密教学の研究』（第十四章 神通乗について）で詳しく分析している。

智顗の時には密教はなかつたが、智顕の教義を活用したのが台密教学であり、その先蹟が『大日經義釈』に求められるとする。秘密の語には「奥深い」という意味があり（一七〇頁）、真言密教における秘密をどのように考えるか課題である。大久保氏は安然の『教時問答』と『菩提心義抄』によつて円密一致を基本としてその問題にあたつている。そして顯教と密教を如何に理解するか問題点を提示しつつ論じていく。

が、もともと仏であると解する思想である。六即の理即・本来成仏・理具成仏という概念が基底にあり、それに眼目を置いた成仏論であると論じている。そして最澄撰と伝わる「一念成仏義」を引用する貞舜の『宗要柏原案立』を検討すると、そこでは一生妙覺を説くことを指摘する。時間論と行位が交差するわけで、妙覺位を一生成仏の果としうる旨を語つてゐる。ここでの結語として大久保氏は、即身成仏や速疾成仏は一生という期限を前提とする場合や瞬間を意味する場合があると論じる。一刹那に無量劫を具するとしても、初住や妙覺に入るにはその位に至るまでの漸次の階梯をどのように理解すべきか問題提起する。

行位論と即身成仏との関係は、大久保氏が『台密教学の研究』（第八章 台東両密における行位論の交渉）で詳しく検討している。

本書では心と仏との関わりを「発心即到と自心仏」として明かしていく。このテーマは東密の論題として知られ、『華嚴經』の「初發心時便成正覺」であり『涅槃經』の「発心・畢竟二不別」とも共通の概念と示す（二〇一頁）。空海の「般若心經秘鍵」を挙げ、真如が身外にあるのではなく、自らの心・身を尊重する記述に繋げ、迷悟が我にあることを根拠として「発心即到」と示されている点を指摘する。「発心即到」の用語は安然の「菩提心義抄」にも見られるという。また自心と仏、あるいは成仏の関連で『大日經義釈』を挙げ、そもそも『大日經』が

仏教の本来の面目が成仏にあることは言うまでもない。その成仏するのに長い時間を要すると説くのが歴劫成仏で、それに対するものとして速疾成仏と即身成仏が説かれてきた。即身成仏と同時に論じられる速疾成仏も一生という期限を前提とする場合や瞬間を意味する場合がある。この時間論を問題として、究極的に対比するものが歴劫と一念や一刹那である。本書ではこの一念成仏に踏み込んだ論考をしており、次にそれを紹介する（一八一～一九九頁）。

本覚思想文献で『伝教大師全集』に「一念成仏義」の項があり、天台小部集釈に最澄述と収まる「一念成仏義」と同内容である。また本覚思想文献に『三十四箇事書』があり、そこにも「一念成仏事」として掲げられた名字即成仏をうたつてゐる。ここで時間としての一念と、一念三千の一念との両方の義を示しつつ、一念を時間と捉えた検討をしている。『法華文句記』によると一念はただ時間的な一念を経過するということだけではなく、一心の法を指す解釈も紹介している。

成仏の遅速をふまえその速疾性を自宗の義として誇示したのが平安初期仏教であり、それが日本天台や東密の教義特色と指摘する（一八六頁）。この速疾性を強調して論じたのが『大智度論』卷三八の記述で、そこには神通の比喩を説いており、この比喩が密教に導入される。また仁空の『義釈搜決抄』に一念成仏の語を見出し、仁空の成仏思想が本覚思想に近いものと指摘する。つまり成仏は凡夫の当体のままの即身成仏を意味する。

また東密の教學は空海の教えを展開させ、同時に台密の影響も見逃せない。本書では台東両密の関わりを考究する上から、注目すべき記述の多い頼瑜の『大日經疏指心鈔』を検討している。そこでは空海で不明瞭であった行位論を頼瑜によつて明かし、日本天台との関連にも言及する（二三七～二四三頁）。

最後に台密諸流の形成について究明し、第四部で円仁撰『金剛頂經疏』の訳註研究を掲げている。この疏の大綱と五重玄義には、台密の根幹となる教義が凝縮して豊富に示され、五重玄義が天台教學そのものであり、円密一致を主軸とする台密の特色が發揮されている（二六六頁）。大久保氏は先行研究の訓読や解釈を修正しながら訳註研究として掲げ大きな成果をあげている。

円仁の業績はやがて安然によって大成されるが、著者には既

に安然に関する多くの論文があるので、安然の教學についての公刊が待ち望まれる。

(龍谷大学教授)

(春風社・二〇一六年)

末木恭彦著

『徂徠と崑崙』

山本嘉孝

一 本書の特色と構成

本書は、近世日本を代表する儒者の一人である荻生徂徠とその門人の山井崑崙について、著者が一九八二～九二年の十年間に発表した論文九篇を合計八章に収める。特に大幅な修正・加筆はない。本書の出版は「偶然」(「あとがき」)であったとのことだが、初出論文がこのような形で一冊にまとめられた意義は大きい。本書の最大の特長は、敢えて抽象的な言い方をすれば、全てを徂徠の色で染めてしまわない徂徠学研究となっている点である。

著者は意識的に、徂徠の經書読解を朱子学撰取の過程として捉えなおしている。これは、徂徎の時代から現在に至るまで、徂徎の學問が専ら朱子学の否定としてばかり取り沙汰されてきており、ことに対する疑念に基づいており、大変貴重な視点である。また崑崙については、徂徎学の單なる繼承者として見做すのではなく、自身の意志と判断によつて「古」への接近を企